アジサイ

アジサイは日本の古来からあるホンアジサイ（ヤマアジサイ）が原種で奈良時代の万葉集に二首詠われています。また、有名な話でシーボルトが本国オランダに帰って、ツッカリニと共著で日本植物誌を発行し、その 14 種の中の一つにオタクサが愛妾のお滝さんからきているのではないかと言われています。この花が六甲山で発見されたと話題になったことがあます。
アジサイの語源は“集真藍”（あづさあい）：藍色が集まった）が最も近いものだと言われています。紫陽花は白居易の漢詩に出てくる花で現在のライラックのようで、平安時代源順がその名をとって呼んだようです。
アジサイはさし木でいくらでも増やせることから園芸家は改良に昔から力を入れなかったようで、むしろ、ヨーロッパに渡り特にフランスが１９００年代に改良し、西洋アジサイとして日本に逆輸入されたようです。
アジサイは昔から土が酸性の場合青くなり、アルカリ性の場合は赤くなると言われてきましたが、その理由は土中のアルニウム成分を酸性土は溶かし吸収しガクのアントシアニンと結合して青くなるとのこと、アルカリ性の場合は吸収しにくいため赤くなるようです。最近の花で吸収しにくい花があり土が酸性でも青くならないものも出てきております。化学的にはガク１g 当たりアルミニウム量４０μｇ以上で青くなるようです。
剪定は花後花首から 3 番目の葉の上１㎝をカットする。化石化している場合は強剪定する。ただし、来年は咲きません。挿し木は枝についている葉の半分をカットして、枝は水切りして挿す。土は肥料を含まず、保水性のある鹿沼土等がよく、確実にしたい場合は発芽促進のホルモン剤をまぶして挿せば 1 ヶ月後根が出てきます。
アジサイは雨によく合い、カタツムリが葉の上に乗りなかなか風情があります。最近は新品種が続々出てきており、最先端の花は母の日のプレゼント用に花屋さんに置かれており、心奪われます。ただし、高価です。
花瓶にさす花は、矢張り小ぶりのヤマアジサイが似合います。
花が終わっても秋まで花柄をそのままにしておくと秋あじさいとなり、これも風情を楽しむことができます。